

汽車で行った人たち

木 梨 謙 吉

河合伸訳のマイケル・バースレイのオリент急行によると、1949年2月ブカレスト駐在のアメリカ大使館付海軍武官ユージン・カープの死体がオーストリアのザルツブルクから数キロの線路わきで発見された。捜査の結果、事件の原因についての満足な解答はついに得られなかった。実際のところ80余年のこの急行列車の歴史のなかでこんな事件はこれだけだったことは特筆すべきであろう。

オリент急行の誕生は1883年というが、そのルートは7本、すべてロンドン、パリ、ベルリンから、オリентすなわち、イスタンブール、アテネ、ブカレストなどに向って走っている。

1883年10月4日に、パリ東駅から終着コンスタンチノーブルまでの道程2880キロを90時間で走る栄光のオリент急行が生まれた。始発から今日まで2つの世界大戦を経たこの列車は多くの歴史ある国々と都市を結んでヨーロッパの人たちのオリентにかける虹のかけ橋であった。

1978年6月17日未明カールスリュエ8番ホームに日本人3名、オーストラリア人1名の4名が集結してパリ発ブカレスト行のオリент急行の乗車を待っていた。西ドイツの朝は早い、もうすっかり明るくなっていた。一行は東大の箕輪さん、信大の木平さん、ANUのWOODさんと私の4名である。現在のORIENT EXPRESSはパリ東駅を23:35に出発しカールスリュエ5:47、ミュンヘン9:46、ウィーン16:10、ブタベスト21:25、ブカレスト11:55となっていて、パリから終着ブカレスト(北駅)まで約36時間20分を要している。

西ドイツの主要駅はスツットガルト、ウルム、アウグスブルク、ミュンヘン、オーストリアはザルツブルク、リンツ、ウィーンである。3人はWOODさんという手頃の英語の話し相手を得て英語で冗談がいえるくらいの愉快的な旅を続けた。車窓の風景もオーストリアの農村の風景は西ドイツ以上に美しい平和な緑の起伏が続いている。小さな鉄橋を渡ると小川のはとりで水浴している子供たちも明るい。

ウィーンの駅で車の編成がかわり進行のむきが反対になった。午後6時ハンガリー領内 HEGYESSHALOMに停る。兵士たちが列んで列車の到着を待ちかまえている。私たちのコンパートメントに入って来て旅券の提示を求めた。この室内には我々4名と外にルーマニア婦人1名がのっていた。

はじめは事なきように思われたのだが、私とWOODさんの旅券にはハンガリーのビザがなかった。木平さんと箕輪さんはちゃんと日本からビザをとって持ってきたし、ルーマニアの婦人は共産圏の人だからビザがなくてもOKであった。私とWOODさんは荷物を持って下車を命ぜられたのである。これは大変なことになったと思ったが、大きな荷物を持って高いステップをおりた。旅券をとられているのでついて行くより仕方がない。言葉が通じないからどうしようもない。反対側の線に列車が一本

止っている。どちらも相当長い車輛の列であるが、その谷間を荷物を持って歩く。車窓からこの異国人を珍しそうに見ている顔、顔。

反対側の列車の最後尾まで来て、そこで将校のような人が、旅券を手渡してくれる。そしてこの反対側の列車に乗れと云う。そのうち今まで乗っていた列車は動き始め夕もやのかなたに行ってしまった。あゝついに箕輪さんたちとまさに東西タモトを分つことになってしまった。

デッキに乗ったが相当の混み方である。行先も全くわからないしまわりの人に聞くにも言葉がない。すぐ列車は走り出した。ハンガリーの荒野を逆もどりに走る。30分かそれより少し長かったか、田舎の駅にとまった。

WOODさんはここで降りるのだと云った。もしこの時WOODさんがいなかったら僕はウィーンまで行ってしまったかも知れない。旅は道連れと云うが、本当にこんなよい道連れがあったのは運がよかった。不思議なことに日本を出る前オーストラリアのキャロンさんからANUの若い人が行くからよろしく頼むという手紙を貰っていたが、逆に私の方がお世話になった始末である。このWOODさんにはその後ルーマニアでの発表のときみんなお世話になった。お礼の手紙を出さなくてはいけないのだがまだだしてない。

駅に出るとハイヤーの運転手が待っていた。私のような不心得なのが多々いるのだろう。このときも勿論私共と同様な人たちが何人かはいしたが、私たち二人だけこのハイヤーで小さなホテルに連れて行って呉れた。そして翌朝7時に迎えに来ると云って帰っていったのである。

ホテルの名は Pension, KATHARINA PERGER で清潔で二人で 30 DM で安い。まだ夕空の明るい道路に出て夕食のレストランをさがす。

このまちはオーストリア領内の Bruch an der Leitha といひライザ川のほとりのブリュクという小さいまちである。

このまちは小さいけれどもなかなか由緒ある町であった。君主制の時代まではここはオーストリアとハンガリーの境であった。今なお駅前にはハンガリー王、カイザー・フランツ・ジョゼットの胸像が立っている。かつてはブリュクの陣営として両国のつわものどもの夢のあとがロマンと文学の中に残されている。北にドナウ川、南にライザ川を持つこの低地オーストリアのライザ地方は海拔 158 m で明るい、ゆるやかな丘と広葉樹群、草原にかこまれ、気候の影響をこれ程よく動植物に反映しているのはオーストリアの他のところではみられないという。かつて陣営の中で兵士たちがねむったように、今日ここは人々の保健休養の場所となっている。

私たちも一夜の宿をこの静かな異国のまちで送ったのであった。

翌朝7時昨日のハイヤーの運転手がやって来た。なかなか親切な運転手である。他に一人フランスの婦人を乗せて、ブルックから今度はまた東へ広い平野を走る。途中パルンドルフ、ニッケルズドルフといった小さな村々を通して国境線に出た。この税関でビザを発行して貰う。私は数枚の写真を

あらかじめ携行していたが、すぐ撮れる機械もちゃんとそなえてあった。自動車でヨーロッパを廻る人たちはここでビザをとるのであろう。

ビザをとって簡単な荷物の検査をすませて昨日降ろされた HEQYESHALON の駅に届けて貰った。昨日降ろされた時はもっと賑やかなところかと思ったら、全く何もない淋しい駅であった。それでも小さな駅の食堂で食事をしたりして列車の着くのを待った。

12時発コンスタンツ行の急行に乗った。WOOD さんはこの駅を出る時写真を一枚とって叫んだ。ネバー・ファゲトン！ 相当腹にすえかねている風だった。ただ通過の印をポンと打てばすむものをと彼は云うのだが、必要なビザがなかったのだからしかたがない。大変よい経験であった。

4時にブタベストに着いた。ここでは沢山の人が乗って来て室が一杯になった。二人のポーランド人とルーマニア人の夫婦であった。車輪つきの小さな世界だ。言葉とお金がないので今夜から明朝まではのまずくわずで頑張るより外はない。それでもブタベストの駅でビールを買う。ポーランド人の一人が僕より年上だと云う。そんな筈はないというので互に旅券を出しあったら不思議なことに生まれた月日が一致していたが、年代は10年彼の方が若かった。ポーランドから黒海のコンスタンツまで魚釣りに行くのだろうか。そばにいたルーマニア人の奥さんはこの光景を見て私が非常に若く見えると云っていると、ドイツ語の出来る御主人が私に云ってくれる。

夕方いくつかのハンガリーの駅を過ぎる。長い貨物列車が向うに見える。人けのないその車輛番号を一人の若い、髪を長くなびかせた長身の女の子が調べて廻っている。異国の印象的な絵である。

またルーマニアの国境カルシチで、ビザのない人たちが何人か降ろされる。今度は降ろされなくてすむ。この列車はウイナー・ワルツァーというのだが名前ほど高級ではない。オリエント急行も東へ行くにつれ車輛編成のあるごとに程度が悪くなる。なにしろオリエント急行では国の検問所は Kehl, Salzburg, Hegyeshalon, Curtici と5カ所、フランス、ドイツ、オーストリア、ハンガリー、ルーマニアにまたがっている。

ルーマニアの国境に入り、夜半を過ぎて、人々が乗りこんでくる。とても横になれるものではない。WOODさんは一等車の方へひき上げて私一人となる。段々人が増えて来て、それに座席券を出して私の席をしげしげ見るのもいる。一生懸命ねむったふりをする。病人の子供をつれた田舎の農家の夫婦のような人たちが乗ってくる。ここでは全く言葉が通じない。朝まで辛棒、食事も水もとらずひたすら汽車が走って、朝が来て、明るくなって、ブカレストに着くのを待つより外に手はない。ブカレストには朝の8時に着いた。ルーマニアの国境前では相当きびしい検問があったが、今回は無事に通過してブカレストについたのであった。ホテルに着いて一ねむりしてユフロの会場に行って皆さんに会い、心配をかけたことをおわびしたのであった。

6月24日会議がすんで帰ることになったが、あの長い道中を来た道をひきかえす気持ちがなくなっ

ていた。オリエント急行の座せき券を入手するためルーマニア国営交通社の窓口で2時間以上立ってようやく手に入れたものの、そのためあわや発表に遅れそうになったりしたが、どうしてもあのオリエント急行で同じ道を帰る気持ちが出て来ない。ところが、私はこのオリエント急行でパリに行くことにしてあり、それも6月26日はフランスのナンシー駅にオリエント急行で着くことにあらかじめ富村周平さんと約束していたのであった。ブカレストのユフロの森林調査の会議は6月19日から6月23日までで、木平さんが最後23日で他は22日に終わった。箕輪さんは質問に答えて It's practical problem とやったので会場一同大いに喝采した。最後のバンケットのとき MATERN 夫妻と一緒にあったが、これは名答であると云った。

さて帰りの途はやはりオリエント急行にブカレストから乗らないで、飛行機でブカレスト～ウィーン～チューリッヒととんだ。同行に箕輪さんが来て呉れた。チューリッヒに24日泊 (Hotel Chese Rustica) 25日チューリッヒ湖で二人で遊んで、Basel 20:46 発インターシテ-108 Markgraf 乗車、ここで再び箕輪さんと別れ、なつかしい Freiburg 21:26 通過、Karlsruhe 22:30 着であった。ここで振り出しの Karlsruhe にもどった訳である。6月24日 18:55 Bucuresti Nord を出発したオリエント急行をここでつかまえて乗ろうと云う訳である。カールスルー 0:33 である。

Karlsruhe の駅の待合室に入ってまつ。広くて誰もいない。ま夜中は少し気味が悪い。しかし隣りが鉄道公安官の詰所であることに気づいて安心する。再び8番ホームに出て夜汽車をまつ。この汽車は6月24日ブカレストを出発し、ひたすら、あの国々を逆に走りつづけてやって来たのだ。遠く遙かに列車の前照燈があかく輝いて次第に近づいて来る。思い出深いオリエント急行である。真夜中の車中は何処に入ってよいかわからない。幸い高校生たちの乗っている室が明りがついていたのでそこにのらせて貰う。Nancy は4時21分着であった。あたりはまだ暗い。この早朝富村さんはホームに来てくれていた。富村さんの下宿で朝の9時頃までやすませて貰って、林業試験場へと出むいて行った。私のオリエント急行はまさに寸断されたオリエント急行であった。かつての栄光にみちたそれではなく、時代の変遷を映していた。この列車の過去の色々な思い出をたどり、はからずもヨーロッパの東部の人々の生活に触れる思いがした。旅行中種々御手数をかけた方々に感謝の意を表します。

(後記: 12月3日 WOOD さんからのクリスマスカードには自由世界が好しいと書いてあった)